

市内 小中学校 高等学校 部活動紹介

水海道一高美術部

本校美術部は、県総合文化祭美術展覧会や各種コンクール等への作品出品やデッサンの向上など、各自が目標を掲げて制作に励んでいます。また、文化祭では作品の展示はもちろん、制作した作品をキーホルダーなどにグッズ化して販売したり、道の駅常総で開催された「常総みんなの未来EXPO」における「海一マルシェ」に参加し、オリジナルの缶バッジを制作・販売するなど、校内外の行事やイベントなどにも意欲的に取り組んでいます。創立125年の歴史と伝統ある素晴らしい環境で、今後も学校や地域に貢献できるように邁進していききたいと思えます。

(美術部顧問・浦和暉)



文芸

石下地方短歌会

笑み浮かべ会釈をかわす女子高生うしろ姿にエールを送る

秋葉 文子

いつもニコニコ笑顔の父が唯一度母の死顔に涙こぼしき

石山 浩三

指折って命の期限推し計る子は頑張れと我は憂える

太田きみ子

長廊下杖つき歩む昼休み施設の友と二度程まわる

鈴木 園子

足の出ぬ媼の小さき手を取れば介護と言えどほほ笑み交す

田中 冬泉

髪白く腰は曲がりて歩めどもはじる事無し我の生き様

中川 庸

吾の植えし西瓜大きく実りたりどつしり座る盆棚の前

野口 光江

我が歩みつかずはなれず秋あかね散歩の吾を誘うごとく

古澤信一郎

紫陽花の切手貼られて待ちに待つ詠草届く小雨降る午後

増田 政

手間かけて義母直伝の栗ご飯お供えすればほほえむ遺影

松崎百合子

太陽の恵み受けて咲き満つ庭の菊世話する吾に喜びくれし

森田千恵子

穏やかな天気恵まれグラウンドゴルフ今日は試合で準優勝

渡辺キミエ

編集後記

一口に「文化」といってもいろいろですが、少し日常とは距離のある芸術性が高いものをイメージする方が多いようです。私は方言や地域性など、茨城の地域文化に興味があり、それを読み物やグッズ、ラップなどにして広める活動をしています。なかでも力を入れているのが茨城弁です。普段はみなさん無意識に使っていて、そもそも茨城弁ではなく標準語と認識している方もいらっしゃると思います。例えば「たいじ」は大丈夫という意味の茨城弁ですが、他県で通じなかったエピソードや由来を紹介すると、驚きや共感を持ってリアクションされる方が非常に多いです。これこそ地域の魅力であり、貴重な地域資源の一つではないでしょうか。徐々に話されなくなっていますが、方言も立派な文化、たっぺー調べてみたら、おもしろいよ。(青木 智也)

事務局

常総市教育委員会  
生涯学習課(石下庁舎内)  
常総市新石下4310-1  
電話 0297-30-8880  
FAX 0297-44-7646

常総市文化協会報

(題字：秋葉 アキヲ)

第28号

発行 令和8年(2026)3月12日

発行責任者 橋本 武夫

永井荷風著『下谷叢話』の主人公

大沼枕山、鷺津毅堂と常総地方の文人たち

文化勲章受章作家である永井荷風の著書『下谷叢話』は、荷風の外祖父鷺津毅堂とその親戚にあたる大沼枕山という、幕末維新期の漢詩人の生涯の著述が中心となっている。枕山、毅堂の伝記をその時々々に制作された詩と併せて記述されているのが特徴である。そこには荷風の漢詩文に対する深い学識が示されている。もともと荷風は外祖父のみならず、明治の実業家であった父が共に著名な漢詩人であり、自身も幼い頃より詩作を学ぶなど、漢詩文を常に身近に感じる環境にあったことによる。常総地方には、『下谷叢話』の主人公である大沼枕山、鷺津毅堂と親交のあった人物がたくさん居た。梅痴上人、秋場桂園、坂野耕雨(久馬)、猪瀬豊城、大沢順軒、信夫恕軒などがそれである。

その中でも、『下谷叢話』では飯沼弘経寺六十七世梅痴の名が多く、の場面に登場する。飯沼弘経寺といえば千姫様で有名なが、創建した嘆蒼良上人や、『累物語』で累の怨霊を鎮めた祐天僧正の名は知られているが、梅痴上人こそ、儒学者・漢詩人の大沼枕山と親交のあった人物であり、芝増上寺の学頭時代から経済的な援助をした支援者であった。また、梅痴は芝増上寺の後、結城弘経寺、飯沼弘経寺と移ることになるが、幾度となく枕山、毅堂は梅痴を訪ねている。

秋場桂園については、文化協会報二十四号で紹介したが、桂園もまた、枕山、毅堂、恕軒などの支援をしていた。坂野耕雨については、枕山の漢詩や毅堂の賛が書かれた掛け軸が坂野家に残されている

たことから、親交を深めていた様子うかがえる。なお、桂園、耕雨、順軒らを枕山、毅堂に引き合わせたのが梅痴であったことも付け加えておく。三坂新田の猪瀬豊城は、一世の碩学であることが世に知られ、かつて結城藩水野侯、下館藩石川侯に召されてその侍講となったこともあった。日本画家猪瀬東寧と漢学者秋葉猗堂兄弟は豊城の孫にあたる。弟猗堂は馬場村の秋葉家の嗣子となり秋葉姓を名乗った。なお、豊城退任後、結城藩校時習館で教授として教鞭を執ることになったのが、枕山、毅堂であったことも知られている。漢学者である大沢順軒は、長塚節の祖父の家に寄寓し、節の母か七歳の頃に初学を授けた人物であり、七、八人の塾生が居たというが、ある日、家の人に挨拶もせず忽然として去ってしまったらしい。水海道の郷土史家富村登著『常総の名人奇人』(昭和三十五年発行)には、「大塚昇は順軒に学んだと言うか



永井荷風著『下谷叢話』

永井荷風著

『下谷叢話』の研究

筆者著書『下谷叢話』の研究



「書道」つれづれまゝに  
常総市書道連盟



年の瀬、清水寺の貫主が大きな紙に一字を揮毫する姿は、年末の風物詩となつた。パソコンが世を分配する中で、書のもつ味や力強さには心打たれるものがある。

そもそも日本人が文字を知り書くようになったのは西暦七〇年の頃、中国人がインドに渡り仏教典を竹に書写し巻き物にして持ち帰ったことから始まった。続いて紙の発明があつたことを知った。

日本人は以来数多くの遣唐使を送り仏教をはじめ、歴史、漢詩を学ぶにあたり文字をはじめ幾多の知識を得たのである。

奈良時代になると、文芸作品も次々と書き、特に女性には女文字と称し漢字ひらがな文体を多く書き流れるような筆体に人は魅了された。太い文字、細い文字、更に掠れを連綿として駆使し芸術品にまで高め、白黒の芸術は巻き物や額に納められるに至つた。

書に感謝しつつ。

(村田 洋子)

### 文化的催事のお届け

水海道芸能団体連絡会

私どもの団体は現在常総市文化協会に加入している芸能関係団体と個人会員の集まりで構成されています。又常総市教育委員会生涯学習課に後援していただいている組織です。伝統芸能の水海道神楽保存会、日本舞踊、詩吟、フラダンス等、九団体があり会員数は百余名になります。

毎年の秋の芸能祭には生涯学習センターの舞台で発表会に参加しております。過去コロナ禍で二年間休止



令和7年度 常総市民文化祭  
第52回 市民芸能祭

となりましたが、令和七年度の芸能祭ですが第五十二回という長い歴史のある発表会になりました。市の職員の方々、会主の方々又市民の皆様のお陰と感謝を致しております。

時代と共にメンバーの減少と高齢化で活動が狭められておりますが令和七年度の祭では前回よりも子供たちが増えて盛大な祭となりました。

(武藤 良生)

### 自然観察を通して

自然友の会

昭和45年、『自然友の会』は、水海道一高教員の木村信之、五木田悦郎、堀越功初代会長石塚文雄(各氏)が、茨城県で最初に立ち上げた自然観察を行う団体です。四季折々の自然観察を通して、地元自然の再発見、年々変わりゆく自然、培われた自然文化等について、講師の解説を交え、楽しい体験や感動すること、また絶滅が心配される貴重な生



「ご入会のお申込は090-87253037(的場)まで、年会費は2000円。

(的場 伸一)

## 常総市の歴史

### 小説『土』の演劇や映画

河合 宏

『土』は、昭和十二年に東京の築地小劇場で初めて演劇化され上演されました。上演した劇団は、築地小劇場を本拠とする新築地劇団(岡倉士朗演出)で、山本安英がお次役を、勘次役に本庄克二(後の東野英治郎の本名で、戦時中に内務省命令により本名を名乗ることを強制された。)を配して公演されました。

当時の新築地劇団の『土』上演について、菊池寛は『話の屑籠』(寛の「文藝春秋」に連載した自らの生い立ちの記で昭和十二年十二月に)で、「劇団不振の秋に、新築地の『土』が好評満員であったのは、注意すべきである。薄田研二(すすきだけんじ。本名は高山徳右衛門。築地小劇場に入り新築地劇団で活躍する。一八九八〜一九七二)君から『土』の上演に際して意見を求められた時、自分は極力反対したが、しかしその後、新劇などあまり見たことのない人の観劇評によっても『土』はかなり面白いらしい。こういう非常時局に際して、新劇がその多年培った

だ欣ばしいことである。』と書いていて『土』の盛況振りが伺えます。



戦後の上演としては、昭和三十年に劇団演出劇場が上演してから平成五年の劇団文化座まで、資料として残されている上演は九回ありますが、これ以外にも昭和四十年代には、色々な劇団が上演していると思われま。最近も茨城県の常陸太田市の市民劇団が『土』を上演しています。

村でも撮影することとなり、昭和十三年四月十四・十五日にスタッフ一同が来村し、鬼怒川縁で流木掘りや武州への機織りに出掛ける村娘の場面等の撮影を行い、その他の場面も撮影しようとしていた二日目の夜間に、宿泊場所の石下駅前の「釜仙旅館」に長塚家から『出来る事なら一刻も早くこの村を離れてほしい。小説のモデルと思われる人々は、今ではずっと良い環境にお

られるし、過去を描くには今日の目はあまりにつらいから』との話があつたと映画『土』のカメラマン碧川道夫氏が常総文学に逸話として書いています。このようなことから地元でのロケは、わずかに二日間、大半の場面は、信州や多摩川撮影所において行われ、製作期間に三年もかかった『土』は、昭和十四年四月に封切られています。

映画『土』についても菊池寛が、『話の屑籠』(昭和十四年五月)に「日活『土』を見たが、なかなかいい映画であつた。今までの映画に見るようなチャチなところが殆んどなかつた。原作よりずっと明るくなっているし、二時間以上かかるが少しも退屈しなかつた。」と評価しています。



土

『土』上映後の八月には、イタリア・ベネチア国際映画展に於いて日本映画総合賞を受賞、翌年二月のキネマ旬報主催の昭和十四年度優秀映画詮衡で、第一位となり最優秀賞、五月には橋田文部大臣より大臣賞と特賞を授与されていますが、残念なことに『土』の完全版は現存していません。

『土』のフィルムは、この世に存在しない幻の映画と思われていた昭和四十三年東映映画副社長「川喜多かし子」さんが、東ドイツの博物館で発見しました。しかし発見されたフィルムは、短縮版輸出用プリントであり所々傷みが激しく、完全版より多くの部分がカットされ、輸出版のためドイツ語の字幕があります。このフィルムは、国立近代美術館フィルムセンターと当時の版權者である「日活」に残され、日活からビデオの販売もされました。

また、平成八年から十年にかけて、国立近代美術館フィルムセンターが、ロシアのゴスフィルムフォンド(ロシア国立映画保存所)で調査を行い、わが国に存在しない作品や現存しても欠落している場面が残されている多数のプリントを確認しました。ロシアになぜ日本の映画があつたのか。それは、戦時中日本が占領していた満州国(中国東北部)に「満州映画協会」という在留邦人用に多くの日本映画を輸入公開した映画機関があり、終戦間際に没収したソ連軍が持ち帰り、ゴスフィルムフォンドに保存されました。

昭和初期の鬼怒川を『土』の映画で見ることが出来ます。今後この『土』を上映して欲しいと思います。





栃木県立博物館



栃木県立美術館

文化協会恒例の会員研修を6月1日(日)栃木県立博物館美術館を目的とし、市本庁バスを利用して頂き、各部会会員総数37名の参加を得て挙行されました。比較的近距离にある博物館ですが、殆どの会員が初見参りと云うこともあり、県立中央公園の広大な美しい立地に驚くと共に、その雰囲気満足されておられた様子でした。この公園に隣接した当博物館は、栃木県の歴史・自然をテーマに充実した展示物によって研修の目的を大いに満たすことが出来ました。加えて、美術館では週刊新潮の表紙絵を永く担当された谷内六郎氏(1981-60歳没)の原画展が特別展として開催されて居り、ほぼ印刷物としての作品を観てきたことと違い、原画の美しさと画業の卓抜さに改めて感じいったことでした。

文化協会会員による、文化研修も多岐に渡って実施されることになり、大いに研修により喧伝される内容は、常総市文化発展に寄与出来るものと、改めて感じ取れるものとなりました。

(水海道造形美術研究所 中山 治)

### 令和7年 常総市文化協会視察研修



- 令和七年度 文化協会役員**
- 会長 橋本 武夫 常総市水海道民謡舞踊連合会会長
  - 副会長 河合 宏 (個人会員) 文芸
  - 監事 石山 修 (個人会員) 染色工芸家
  - 小田部芳美 (個人会員) 郷土史
  - 梅澤 隆 (個人会員) 竹工画
  - 川上みちよ (個人会員) 美術家
  - 青木 智也 (個人会員) 常総ふるさと大使
  - 大塚 裕一 (個人会員) 一言主神社宮司
  - 梅澤三恵子 水海道混声コーラス代表
  - 顧問 中山 治 水海道造形美術研究所主宰

**文化協会会長新任挨拶 橋本 武夫**

今年度より常総市文化協会会長を皆様のご推挙により務めさせて頂きます、橋本武夫です。どうぞよろしくお願い致します。

私が文化協会へ入会して18年、多くの人に助けられ歩んでこられたことに感謝です。

私なりの文化感には常に演ずる側、見聞側が、楽しさ、和やかさを共感することから始まるものと思います。又、先人先輩方が伝承して来た地方文化を、次世代に

引継ぐことも重要な役目と痛感します。

正に文化協会が協力して常総市の文化を育て、維持発展に邁進できますよう願う所です。

前年度まで長年ご尽力頂いた中山前会長に敬意を表すると共に、本年度役員一丸となり、文化協会発展に全力投球の覚悟であります。どうぞ関係各位、市民の皆様のご支援ご協力頂けますようお願い申し上げます。新任の挨拶と致します。

## ふるさとへの便り

本市出身あるいは縁のある方で、現在文化活動等でご活躍中の皆さんからのお便りをご紹介します。



**常総市から世界へー ボディビルを通じて伝えたいこと**

アーノルドクラシックヨーロッパ 2024日本代表

横関 裕二

私は常総市国生で生まれ育ち、現在はボディビル競技者として、またパーソナルトレーナーとして活動しています。幼い頃から体を動かすことが好きで、運動は私にとって日常の一部でした。学生時代は野球に打ち込み、そこで培った「継続する力」や「努力する姿勢」は、今の自分の土台になっています。

ボディビルとの出会いは、人に安心感を与える身体になりたいと思ったことがきっかけでした。最初は見よう見まねで始めたトレーニングでしたが、努力が目に見える形で結果として現れることに強く惹かれていきました。筋肉は一日で

成長するものではありません。だからこそ、日々の積み重ねが何よりも大切であり、その過程に大きな価値があると感じています。

ボディビルを通して私が得たものは、筋肉だけではなく、困難な状況でも前向きに考える思考、そして人としての忍耐力です。思うように結果が出ない時期や、色々な困難もありましたが、その一つ一つが自分を成長させてくれました。

私がボディビルを通して伝えたいのは、「年齢や環境に関係なく、人は変われる」ということです。私は特別



な才能に恵まれていたわけではありませんが、正しい努力を続けることで、確実に前へ進むことができます。これは競技の世界だけでなく、仕事や日常生活にも通じる考え方だと思っています。

現在は競技活動と並行して、ボディメイクや健康づくりを目的としたパーソナルトレーニングの指導を行っています。特に、運動に苦手意識を持つ方や、体力

**略歴**

1994年1月17日生まれ。

常総市立岡田小学校、常総市立石下西中学校、茨城県立古河第三高等学校、国士館大学卒業。

現在は茨城県つくば市を中心に、パーソナルトレーナーとして活動。

2019年 茨城ボディビル選手権優勝。

2024年 アーノルド・クラシック・ヨーロッパ クラシックボディビル175cm級優勝。

2024・2025年ボディビル日本代表選手として国際大会に出場。

2024年には世界一のタイトルを獲得することが



不安のある方にも安心して取り組んでもらえる指導を心がけています。今後は、地元常総市での活動をさらに広げ、運動を通じて地域の皆さんの健康寿命の増進に貢献していきたいと考えています。

常総市は、私にとって原点であり、心の支えとなる場所です。応援してくれる家族や友人、仲間、地域の方々の存在があるからこそ今の自分があります。その感謝の気持ちを忘れず、これからも挑戦を続けていきます。

2024年には世界一のタイトルを獲得することが

できましたが、これは常総市で育ち、多くの方々に支えられてきた結果だと感じています。今後も変わらぬ挑戦者として、常総市から世界で活躍するボディビルダーを目指し、自分らしく一歩一歩前進していきたいと思えます。

最後になりますが、常総市文化協会の更なるご発展をご祈念申し上げます。

(担当 大塚 裕二)



芸術文化のつどい

令和7年6月12日～15日



令和7年度

市民文化祭

令和7年10月25日～11月3日